

ドゥクチャップ村を取り上げる。ドゥクチャップ村に対するキリスト教の伝道活動は三年前にようやく本格化したばかりであり、キリスト教は更なる信徒獲得のさなかにある。こうした状況においては、キリスト教を巡る人々の葛藤や対立が顕在化しやすいということから、ドゥクチャップ村は格好の研究事例であるといえるだろう。

具体的には二〇〇九年七月に行われたドゥクチャップ村での調査のデータを基に、右記の課題にアプローチしていく。作業の内容は、キリスト教信者の家系図の精査、そこに見出される特徴についての聞き取りを交えた分析、および親族関係に起因する対立や葛藤の分析である。

異文化にはわれわれとは異なった「宗教」や「信じる」ということのあり方があるということは、これまで広く指摘されてきた。だが、そうした指摘は往々にして「宗教」や「信じる」ということに多様なあり方が存在することを指摘するのみに終始し、具体的に人々にとって「宗教」や「信じる」といったことがどういうことなのか、われわれ側の概念とどのように異なっているのかという問いを放置する傾向がある。本研究は現地の人々の具体的な実践や語りに着目することで、このようなより大きな問題に対しても貴重な研究事例を提供することができるとであろう。

転換期仏教寺院における活動

——イメージ戦略と感情労働の間——

高橋 嘉代

現代のわが国の既成仏教を語るに際し「葬式仏教」としての側面、そしてこの側面からみた「仏教の形骸化、寺と人々との関係の希薄化」は、わが国の既成仏教の問題状況として繰り返して言及されてきた。この言説が繰り返される背景を分析するにあたり、本報告では寺院や僧侶に対する役割期待と、その反映として現われる寺院側の活動の性質に注目したい。

新規入檀の際には、墓地や寺院の立地条件や墓地の借用条件と共に、住職や寺族の「人柄も見えて」入檀を決めるという傾向が指摘される。一方、何世代にもわたって寺檀関係を継続してきた檀家たちは、自身の檀那寺およびその住職に対しては「自分たち」が支えてきた「自分たち」の先祖の祀り場・その管理責任者という意識が概して強い。したがって同一寺院の檀家中でも、自身の檀那寺やその僧侶たちに対して異なった役割期待があることが伺える。

僧侶の側に目を転じてみよう。檀那寺の僧侶として携わる葬送の現場は、彼等彼女等にとって高度な感情労働の現場でもある。聖職者としてより相應しい振る舞いという役割期待を前提とし、葬送の現場における僧侶たちは人の死をめぐる感情管理に務め、自らのものとして自発的にあらわれる感情と、立場上・職業上相應しいとされる感情表現との調整をはかる。さら

第10部会

に檀那寺の僧侶は日々の生活の中でも不断の感情管理を続けることが陰に陽に期待され、仮にその期待から逸脱した感情表現をおこなったと見なされた場合には何らかのかたちでサンクシヨンを受けることにもなる。これらの動きの一方で、多様化する檀家層に対し、檀那寺の側から「あるべき家族像」の提示を意識的にめざそうという例も散見され、とくに親近感や「癒し」、そして一家の歴史をノスタルジックに語るといった感情的な側面において「家族以上に家族らしい」関係性を目指そうとしている動きも伺える。これは既成仏教寺院および僧侶たちに対する家(族)イデオロギー再生産装置としての役割認識に基づいた、一種のイメージ戦略とも言い得るだろう。

人々のライフスタイルの多様化を背景として、檀家となっている人々の層も従来と比べると多様化が進んだ。したがって、それぞれが異なった役割期待を寺院や僧侶に対して抱いている蓋然性は高い。さらに檀家の側において「望ましい葬儀・墓のあり方」「望ましい寺院/僧侶」に関する多くの情報を容易に得ることができるようになった。その結果、寺院の方針や僧侶の行動、僧侶と在俗の人々との関係性における「より望ましいあり方」の比較準拠となす対象は増加しまた多様化する。このために僧侶に対する期待の水準が全般的に高くなっている、言い換えれば檀家たちは自身の檀那寺やその寺院の住職のありように関して「ハイレベルな比較対象を多数認識しているが故に、自らの檀那寺の不足点がより目につく」といったいわば相対的剝奪の状態になっているということが考えられる。このことが、既成仏教の問題点として既成仏教寺院の「葬式仏教」的

側面が繰り返し論じられるようになる一因といえよう。一方で寺院側の活動においては、多様化する檀家層に対し、檀那寺の僧侶として向き合う際にはより高度でかつ不断の感情労働、およびイデオロギー装置としての意識的な活動が必要になってきていることが伺える。これによって従前では念頭に置かれることの無かったタイプの既成仏教寺院およびその檀家との関係性が広がってゆく可能性がある一方で、複雑化する感情管理の結果、僧侶や寺族たちにおける感情の疎外、そして教理からの疎外という現象も起こりえる。今後は現代のわが国において寺院運営にあたるに至った僧侶たちがいかにしてこの二つの疎外状況の危機に対処してゆくかということに目を向けてゆく必要があるだろう。

パンニャーサジャータカ研究の意義

茨田 通俊

『パンニャーサジャータカ』(Pāṇiśa-jātaka 五十ジャータカ)とは、東南アジア地域に独自に流布したジャータカ群である。これは、いわゆる聖典ジャータカとは異なる偽経ジャータカである。一般に五十話にまとめられた同名のジャータカ集成が、東南アジア各地に存在するのであり、決して特定の本生話集成を意味するものではない。

その多くは、パーリ語等で書かれた貝葉写本として残存して